

授業科目名	共生と場所文化	単位数	2
担当教員名	鬼頭 秀一	担当形態	単独
実務内容 (実務家教員の場合)			
「学位授与の方針」との関係 A～Fに関連している。 A:「場所文化」という考え方自体、他領域にわたる学際的な学問であり、環境に関わる専門的知識を生かした上で、狭い専門領域を超えて統合している。 B:環境倫理の問題を、環境に関わる具体的な問題の現場で、どのような形で専門知や統合知を使って実践する例を提示している。 C:環境に関わる、人間以外の生命や先住民族のような遠く離れて異なる文化的社会的基盤で生きている人たちに対して、共感を持って理解することを中心的に取り上げている。 D:環境に関わる社会的公正の問題を中心的に取り上げているため、他者を認め、排除しないあり方、さらに、それを乗り越えて仲間を作り協働の精神で新たな方向性を模索し、広い意味での自然との共生の道筋を提示している。 E:具体的な問題提起に対してグーグルクラスルームで議論してそれを共有することを通じて、改めて共生社会の道筋を学生自身の関心の中で探究していくことを求めている。 F:限られた時間内であるが、講義自体が開いていることで、この講義をきっかけにさらに学び続けて探究していることを求めている。			
授業の到達目標及びテーマ (1) グローバルな市場経済が席卷して、世界中の人々の地域の暮らしの土台さえ奪ってしまう状況の中にあり、その中で、人々が、それぞれの地域で、その地域に根ざした生活を組み立て直していくことが必要になってきている。その中で、「場所文化」という概念が一つのキーワードとして意味を持ち、その概念に基づいて、多様な地域が循環共生型の社会を構築し、グローバルに共生する形があることを理解する。 (2) 「場所」という概念が単なる「空間」と異なり、人間の「生きられた空間」であり、人間の意図や行動の中心であり、また意志の対象にされた物体や出来事にとっての文脈、背景であるということ。それゆえ、そこに生きる人たちの意識や行動の蓄積によってつくられていくものであり、世界中のさまざまな多様な人々によって多様なものとしてあること。それは、人間が自然的空間に働きかけて創造していく「文化」とも密接に関係しており、それが「風土」であることを理解する。 (3) 「場所」の持つ「共生」の視点について理解する。持続可能な社会の構築は、グローバルな課題であっても、ローカルな地域社会が基盤になればそれを達成することはできない。その意味で、持続可能な社会は、グローバルな課題といえよう。自然との共生という課題も、宇宙船地球号というような形でグローバルに考える以前に、それぞれの「場所」の問題であるということは、環境倫理の中でも展開されてきている。「風土」と環境倫理の関係を文献から理解し、「場所」の持つ「共生」の契機を理解する。 (4) 緯度と経度で区切られた絶対空間ではなく、生命が息づく「場所」から自然に根ざして生きる人間の居住空間のあり方を問うたのは、バイオリージョナリズム（生命（生態）地域主義）である。気候的、地形的な自然条件によって限定づけられたところに、様々な植物や動物などの生物が生育して特徴ある生態系を作っているが、その生命の営みに			

よって特徴づけられた地域の単位が「生命（生態）地域」である。このように生態系における自らの位置を学び、その「場所」に対する責任を引き受ける「再定住」の持っている意味を理解する。この「再定住」によってこそ、「場所の感覚」を深めつつ、そこでの新しい生き方や価値観を希求していくことになる。このような営みとして「場所の文化」を模索することになるが、そのようなものとして「場所文化」を捉え、人が「生命（生態）地域」で生きていくことの意味を、この「生命（生態）地域主義」の考え方から理解する。

- (5) 場所文化を理解するためには、「生命（生態）地域」のように、その場所での生命の営みを理解するだけでなく、その「生命（生態）地域」の上で、どのような形で人々が暮らしを作っていくのかということが重要である。それぞれの「生命（生態）地域」に対応した特異的な人々の暮らしがあり、それが「共同体」という社会的な形を作ってきた。その共同体のあり方についての内山節の議論を元にして、日本の伝統的な共同体がどのように作られ、それがその地域の「場所文化」とどのような関係を持っているのかについて理解した上で、現代の共同体のあり方について理解を深めたい。特に、市場経済との関係の取り方が現代では重要になってくるが、そもそも、共同体における経済的なあり方についての理解し、それが、持続可能な地域社会をどのように作っていく可能性があるのか重要な課題となる。その地域における産業のあり方を考えたとき、三澤勝衛が提起した「風土産業」を考えていく必要がある。地域の自然に根ざした産業のあり方が、自然の威力に立ち向かい、自然の資源や地域の力を生かしていくことにつながり、それが「場所文化」の持続可能な開発に深い関係があることを理解する。
- (6) 三澤が希求した「風土産業」のコンセプトを現代に活かして形にしていこうと模索しているのが吉澤保幸である。吉澤は、もともと日銀の金融の専門家であるが、リーマンショックと東日本大震災を経て、グローバル化の「終わり」を論じている。その上で、ローカルからの始まりを構想し、実践的な形で日本の地方の各地において、グローバルな市場経済の「冷たいお金」に対抗した「温かいお金」の可能性について、多くの地域におけるさまざまな地域経済の可能性について構想の実現かを検証している。「温かいお金」を可能にする基盤として、それぞれの地域の持つ「場所文化」がある。そして、その「場所文化」におうじた持続可能な社会のあり方を実践的に示そうとしている。それらのさまざまな可能性について理解して、これからの社会のあり方を、「場所文化」ということを軸に、展開し、それが「共生社会」を実現していく大きな契機になることを理解する。

授業の概要

グローバルな市場経済が席卷して、世界中の人々の地域の暮らしの土台さえ奪ってしまう状況の中にあり、その中で、人々が、それぞれの地域で、その地域に根ざした生活を組み立て直していくことが必要になってきている。その中で、「場所文化」という概念が一つのキーワードとして意味を持ち、その概念に基づいて、多様な地域が循環共生型の社会を構築し、グローバルに共生する形がある可能性がある。

「場所文化」という概念を考えたとき、「場所」と「文化」の二つの要素から考える。

まずは、「場所」という概念である。「場所」の概念に関しては、エドワード・レルフが『場所の現象学』で議論し展開したことに即して、テキストを読みながら考えていく。第1章――「場所の概念」と第3章「場所の本質」のテキストを読み、「場所」の概念は、単なる「空間」と異なり、人間の「生きられた空間」であり、人間の意図や行動の中心であり、また意志

の対象にされた物体や出来事にとっての文脈、背景であることを理解する。さらに、第4章「場所のアイデンティティ」を読み進めることで、それゆえ、そこに生きる人たちの意識や行動の蓄積によってつくられていくものであり、世界中のさまざまな多様な人々によって多様なものとしてあること。それは、人間が自然的空間に働きかけて創造していく「文化」とも密接に関係していることを理解する。さらに、和辻哲郎の『風土』の第1章「風土の基礎理論」を読んで、それが「風土」であることを理解する。この「場所」を「風土」として捉えることで、「共生」への視点の手がかりとなる。

次に、「場所」の持つ「共生」の視点について理解する。持続可能な社会の構築は、グローバルな課題であっても、ローカルな地域社会が基盤になればそれを達成することはできない。その意味で、持続可能な社会は、グローバルな課題といえよう。自然との共生という課題も、宇宙船地球号というような形でグローバルに考える以前に、それぞれの「場所」の問題であるということは、環境倫理の中でも展開されてきている。その代表的なものは、オギユスタン・ベルクの風土学である。ベルク『地球と存在の哲学』第3章「人間の住まいの尊重」第4章「「ここ」から宇宙へー倫理の場所」を読み、「風土」と環境倫理の関係を理解し、さらに桑子敏雄『環境の哲学』第4章「ローカルであること」と「グローバルであること」を読み、鬼頭秀一の「環境倫理における風土性の検討」を読むことで、「風土」という視点から、自然との共生ということを主題とした環境倫理の重要な考え方の基本がそこにあることを理解し、「風土」ということを通して、「場所」がもつ「共生」の契機について理解する。

「場所」と「共生」ということを考えたときに、ディープ・エコロジーの一つの潮流である、「生命（生態）地域主義」という環境思想が、そのことに一つの考える方向性を示してくれる。「生命（生態）地域主義」は、アメリカ合衆国の社会において、緯度と経度で区切られた都市計画で考えられている絶対空間ではなく、生命が息づく「場所」から自然に根ざして生きる人間の居住空間のあり方を問うた。「生命（生態）地域」として次のようなことが考えられている。気候的、地形的な自然条件によって限定づけられたところに、様々な植物や動物などの生物が生育して特徴ある生態系を作っているが、その生命の営みによって特徴づけられた地域の単位が「生命（生態）地域」である。この「生命（生態）地域」を想定し、アメリカ社会の緯度と経度で区切られた都市計画の都市においても、このような形で生態系における自らの位置を学び、その「場所」に対する責任を引き受けることを考え、「再定住」という概念を出している。この「再定住」によってこそ、「生命（生態）地域主義」の重要な行動計画である。そこにおいて、「場所の感覚」を深めつつ、そこでの新しい生き方や価値観を希求していくということが運動として考えられている。このような営みとして「場所の文化」を模索することになる。そのようなものとして「場所文化」を捉え、人が「生命（生態）地域」で生きていくことの意味を、この「生命（生態）地域主義」の考え方から理解することができるのである。この中心的な思想家であり詩人のゲイリー・スナイダーの『場所を生きる』の中から、第8章「「アメリカ」から「亀の島」へー生態地域主義」第9章「「場所の文化・自然の文化」」を読み、上記の思想の意味を考え、理解する。

さて、場所文化を理解するためには、「生命（生態）地域」のように、その場所での生命の営みを理解するだけでなく、その「生命（生態）地域」の上で、どのような形で人々が暮らしを作っていくのかということが重要である。それぞれの「生命（生態）地域」に対応した特異的な人々の暮らしがあり、それが「共同体」という社会的な形を作ってきた。その共同体のあり方についての内山節の「日本の伝統的な共同体を読み解く」『内山節著作集15 増補 共同体の基礎理論』の議論を元にして、日本の伝統的な共同体がどのように作られ、それがその地

域の「場所文化」とどのような関係を持っているのかについて理解した上で、現代の共同体のあり方について理解を深める。さらに、特に、市場経済との関係の取り方が現代では重要になってくるが、内山節の「共同体と経済の関係をめぐって」『内山節著作集Ⅰ 5 増補 共同体の基礎理論』の議論を元にして、そもそも、共同体における経済的なあり方についての理解し、それが、持続可能な地域社会をどのように作っていく可能性があるのかについて検討を重ねたい。

そして、さらに、その地域における産業のあり方を考えたとき、三澤勝衛が、「自然の威力」「地域の力」による地域振興を『三澤勝衛著作集 風土の発見と創造Ⅰ 地域個性と地域力の探求』や「風土産業」入門『三澤勝衛著作集 風土の発見と創造Ⅲ 風土産業』のなかで提起している「風土産業」を考えていく必要がある。地域の自然に根ざした産業のあり方が、自然の威力に立ち向かい、自然の資源や地域の力を生かしていくことにつながり、それが「場所文化」の持続可能な開発に深い関係があることを理解する。

三澤が希求した「風土産業」のコンセプトを現代に活かして形にしていこうと模索しているのが吉澤保幸である。吉澤は、もともと日銀の金融の専門家であるが、「グローバル化の終わり」『グローバル化の終わり、ローカルからの始まり』の中で、リーマンショックと東日本大震災を経て、グローバル化の「終わり」を論じている。その上で、ローカルからの始まりを構想し、実践的な形で日本の地方の各地において、グローバルな市場経済の「冷たいお金」に対抗した「温かいお金」の可能性について、多くの地域におけるさまざまな地域経済の可能性について構想の実現かを検証している。「温かいお金」を可能にする基盤として、それぞれの地域の持つ「場所文化」がある。そして、その「場所文化」におうじた持続可能な社会のあり方を、「ローカルからの構想」『生命文明の時代』の中では、実践的に示そうとしている。それらのさまざまな可能性について理解して、これからの社会のあり方を、「場所文化」ということを軸に、展開し、それが「共生社会」を実現していく大きな契機になることを理解する。

授業計画

- 第1回：グローバルな市場経済の席卷とローカルな地域経済と生命文明の危機
 - 第2回：「場所文化」というキーワードの意味と共生社会の可能性
 - 第3回：「生きられた空間」としての「場所」への注目とその意味
 - 第4回：人間が自然的空間に働きかけて創造していくものとしての「文化」の可能性
 - 第5回：「風土」と「文化」の相互関連的な関係について
 - 第6回：自然との共生におけるグローバルとローカル
 - 第7回：風土からとらえる環境倫理
 - 第8回：「場所」の持つ「共生」の契機
 - 第9回：「生命（生態）地域」から捉える人の暮らしと場所
 - 第10回：生命（生態）地域主義における再定住の意味と場所の文化
 - 第11回：自然村（「生命（生態）地域」における人の暮らしと共同体
 - 第12回：日本の伝統社会における共同体と社会と経済
 - 第13回：風土産業から捉える場所文化と持続可能な社会
 - 第14回：グローバル市場経済社会の落日とローカルな地域経済の構築
 - 第15回：場所文化に基づく「温かいお金」を軸にした持続可能な地域経済と共生社会の構築
- 定期試験

教科書

「共生と場所文化」の内容は、2018年4月に閣議決定された第五次環境基本計画の根幹を

なす「環境・生命文明社会」「地域循環共生圏」「森里川海」という概念の思想的基盤をなすものである。それは、21世紀の目指すべき持続可能な文明社会を「生命文明の社会」と捉え目指していく大きな社会運動の中で、吉澤保幸たちが、グローバルな市場経済の中で生き続けられる地域社会を築き上げ、実践するために、自然と暮らす地域の価値を捉える重要な概念として創出された「場所文化」という概念を軸にして展開される。その社会運動の立役者たちがそれを総括的に論じた『生命文明の時代』はテキストの中心に据えられるが、「場所文化」という概念のもとになる思想的起源はもっと深いところにあり、そこから理解することが求められる。レルフに代表される、「生きられる『場所』」の概念、和辻に始まり、ベルクに至る「風土」概念、三澤勝衛の「風土産業」、「場所を生きる」ことを再発見したスナイダーなどの生命地域主義の人たちの「棲み直し」、内山節の「ローカルな思想」「共同体論」、鶴見和子から岩佐礼子に至る「内発的発展」の議論など、一つの大きな基軸に向かった多くの議論を背景としている。そのため、『生命文明の時代』の一部に加えて、上記の主要な議論に関するさまざまなテキストを、グーグル・クラスルームで、PDFファイルとして共有して読んで学んでいただくことになる。テキストを一冊購入して学ぶという形の科目ではないので、グーグル・クラスルームでその一部が提供される文献群を掲げておきたい。グーグル・クラスルームでは、学修に必要な箇所に関してはPDFで提供されるが、学びを進めるのに必要と思うときには購入して読むと世界が広がると思うので書誌データは明らかにしておきたい。

※グーグル・クラスルームでは、学修に必要な箇所に関してはPDFで提供される（書籍の購入は必須ではない）

1. エドワード・レルフ『場所の現象学—没場所性を越えて』（ちくま学芸文庫）筑摩書房、1991年。ISBN:4480084797
2. 和辻哲郎『風土』岩波書店、1935年。ISBN-10:4003314425
3. オギュスタン・ベルク『地球と存在の哲学—環境倫理を越えて』筑摩書房、1996年。ISBN:4480056831
4. 桑子敏雄『環境の哲学』講談社文庫、1999年。ISBN:4-06-159410-9
5. 山里勝己『場所を生きる—ゲーリー・スナイダーの世界』山と溪谷社、2006年。ISBN:4635419991
6. 内山節『内山節著作集Ⅰ 5 増補 共同体の基礎理論』農文協、2015年。ISBN:9784540092152
7. 三澤勝衛『風土産業』農文協、2008年。ISBN:9784540082061
8. 安田喜憲ほか編『生命文明の時代』インプレス、2019年。ISBN:9784802095907
9. 吉澤保幸『グローバル化の終わり、ローカルからの始まり』経済界、2012年。ISBN:97847667852031

参考文献

1. エドワード・レルフ『場所の現象学—没場所性を越えて』（ちくま学芸文庫）筑摩書房、1991年。ISBN:4480084797
2. 和辻哲郎『風土』岩波書店、1935年。ISBN-10:4003314425
3. オギュスタン・ベルク『地球と存在の哲学—環境倫理を越えて』筑摩書房、1996年。ISBN:4480056831
4. 桑子敏雄『環境の哲学』講談社文庫、1999年。ISBN:4-06-159410-9

5. 山里勝己『場所を生きる－ゲーマー・スナイダーの世界』山と溪谷社、2006 年。
ISBN:4635419991
6. 内山節『内山節著作集Ⅰ 5 増補 共同体の基礎理論』農文協、2015 年。
ISBN:9784540092152
7. 三澤勝衛『風土産業』農文協、2008 年。ISBN:9784540082061
8. 安田喜憲ほか編『生命文明の時代』インプレス、2019 年。ISBN:9784802095907
9. 吉澤保幸『グローバル化の終わり、ローカルからの始まり』経済界、2012 年。
ISBN:97847667852031

学生に対する評価

レポート評価（50％）、科目修得試験（50％）を総合して評価する。